

「国立台湾大学サマープログラム参加報告書」

京都大学経済学部4年 楠木秀憲

私が2013年夏に京都大学を通じて参加した国立台湾大学のサマープログラム「Summer Intensive Program for Chinese Language & Culture」において学んだこと・感じたことを述べます。

そもそも私がこのプログラムに参加したのは2つの理由があって、1つは中国語を勉強するため、もう1つは台湾という特異な隣国について理解を深めるためでした。近年、欧米の経済が低迷を続ける中で中国や台湾を含めたアジア諸国の台頭は著しく、今後自分の人生の選択肢を増やすことを考えると、中国語を勉強するというのは非常に自然な選択肢に思えます。また、世界的に見て隣国同士というのは経済的・政治的な理由から友好的な関係を保つのが難しく、加えて日本は第二次世界大戦前に台湾を占領・統治していたにも関わらず、現在の台湾が親日国であるということは自分にとって非常に大きな謎でした。この問題について理解を深めることが、自分にとってこのプログラムに参加することの2つめの目的でした。

そして今、この一ヶ月のプログラムを終え、自分はこれらの点において非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じています。中国語学習という意味では、初めて中国語を習う自分にとって想像以上に予習・復習量が多く厳しい授業が待ち構えていましたが、それでも放課後に付きっきりで勉強を手伝ってくれた国立台湾大学の学生達の支えもあって、最終的には参加前と参加後で最も点数が伸びた The Most Improved Student という称号を頂くことができました。また、このプログラムは中国語の勉強というパートに加えて「Exploring Taiwan」という台湾の文化を勉強するパートがあり、そちらでは台湾の書道や武道、寺の散策や故宮博物院の見学といった様々なアクティビティを通して台湾の文化への理解を深めることができました。

そういったアクティビティを通して国立台湾大学の学生や欧米からの留学生と交流する中で気付いたことは、現在の日本の歴史・文化を作り上げてきた先人たちの偉大さです。先ほど取り上げた台湾が親日である理由の大部分は、実は日本が台湾統治時代に欧米的な搾取を目的とした植民地化政策をとらずに、現地の教育や技術発展に力を注ぎ台湾の経済成長・近代化に大きく貢献したからです。これは当時の日本の情勢や戦争における常識を考えると驚くべきことであり、当時の日本人の人間性の素晴らしさを教えてくれます。また、現代においては日本の電子製品や漫画・アニメといったサブカルチャーが世界的に認められ、日本という国を世界的に誇れるものになっています。

私は現在大学の4年生で、来年の4月から社会人として働き始めます。学生というのは社会から投資してもらっている立場であり、社会に出るといことはつまりその御礼を社会に還元することだと私は考えています。そしてこれから誰に対して何を還元するかということを考えた時に、私は日本という母国と、自分たちを思ってくれている台湾という国に対して、自分なりにできることを追求していきたいと思っています。最後になりますが、自分を送り出してくれた京都大学の教職員の方々、台湾で素晴らしいプログラムを提供してくれた国立台湾大学の方々、一緒に台湾で素晴らしい思い出を作ってくれた世界中の学生達、そして帰国した自分を暖かく迎え入れてくれた家族に感謝を述べて、今回の報告を終えたいと思います。